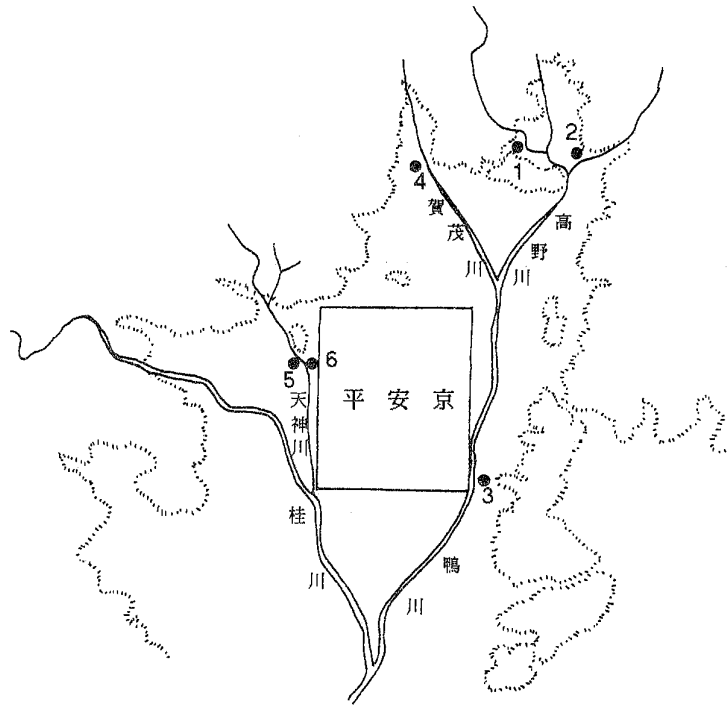


# 平安京跡隣接地・安井西裏瓦窯跡

発掘調査現地説明会資料



- 1 栗栖野瓦窯跡
- 2 小野瓦窯跡
- 3 池田瓦窯跡
- 4 河上瓦窯跡
- 5 森ヶ東瓦窯跡
- 6 今回発見した瓦窯跡

平安京跡とその周辺に分布する平安時代中期の瓦窯跡

1997年10月4日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京跡隣接地・安井西裏瓦窯跡発掘調査現地説明会資料

所在地 京都市右京区太秦安井西裏町3番地他

調査期間 1997年5月16日～継続

調査面積 約2,300㎡

1 調査の経過

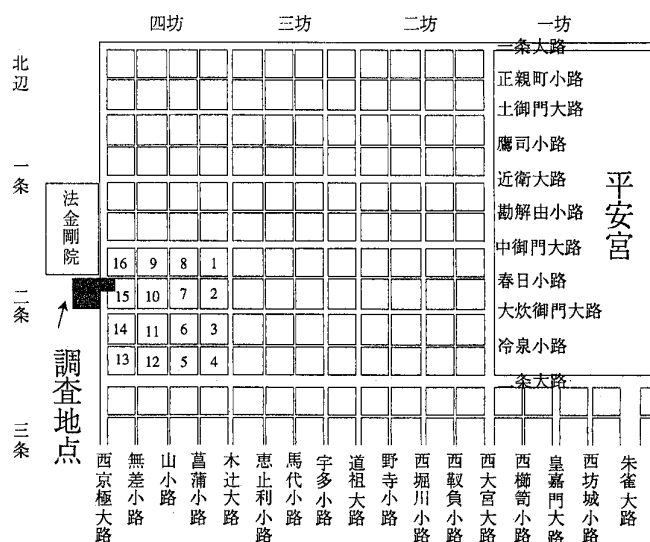
この場所に京都市北部（右京）文化会館（仮称）が建設されることになり、1996年9月から10月にかけて遺跡の残存状態を調べるため事前に試掘調査を実施した。その結果、敷地の東部では道路跡や建物跡などを検出し、敷地の南西部では平安時代の瓦を包含する土層を確認できたことから、発掘調査を実施することになった。

発掘調査における各調査区の配置は、敷地北西部の文化会館建設予定地にB区、敷地中央部の北東から南西へ通じる道路部分にA区・C区・D区を設定した。発掘調査は現在も継続中であるが、これまでに瓦窯跡を始め、平安京に関連する遺構および平安京の郊外に当たる地域でも多くの発見があった。瓦窯跡は調査中であるが、複数回にわたる改築が行われた痕跡が上面からも確認でき、作り替えられた経過がうかがわれる。

2 調査地点周辺の様子

この場所の遺跡の概要を示すと、敷地北側の道路は平安時代の春日小路（幅4丈＝約12m）と呼ばれる東西道路にほぼ重なる。また、調査対象地の南端付近は大炊御門大路（幅10丈＝約30m）と呼ばれる東西道路があったとされ、それぞれ平安京の西を限る西京極大路（幅10丈）まで延

平安京右京



平安京の北西部と調査地点

長していた。西京極大路は南北方向の道路で、敷地北側の出入り口付近にあった。したがって、西京極大路の東側は平安京の中になり、平安京の表示で示せば右京二条四坊十五町に当たる。大路の西側は郊外となるが、ここも次第に開発が進められた。平安時代後期には北接して法金剛院<sup>ほうこんごういん</sup>が、鎌倉時代には南接して竜翔寺<sup>りゅうしょうじ</sup>が建立されている。

一方、この場所の西側には御室川（天神川）が南流するが、川の右岸（西側）で森ヶ東瓦窯跡<sup>もりがひがしがようあと</sup>と呼ばれる平安時代中期の瓦窯跡が発見された。ここで焼かれた瓦は、平安宮・京や寺院跡、さらには滋賀県や大阪府の遺跡でもみつまっている。

### 3 各調査区の概要

この敷地全体の地形は、現在では平坦であるが、調査で検出した地山（遺物の入らない古い土層）の検出面は地点によって高低差がみられる。西京極大路を含む平安京内では、地山は比較的浅いところで検出できるが（C区東部・D区）、西に向かって低位となる傾向にある（C区西部・A区東部・B区）。しかし、敷地の南西部では再び地山が高まっており（A区西部・同南部）、この高まり部で瓦窯跡を検出した。しかし、低位に当たる箇所でも多くの遺構を検出している。

**A区**（面積：約460m<sup>2</sup> 現地表面からの深さ：-1.3～2.2m） 調査区の西側では地山が高まるが、東側では西側の高まり部に比べ約0.7m低くなる。また、この調査区の西側で実施した試掘調査（敷地西側の墓地の南）では現地表下約2.5mで地山を検出しており、西方の宇多川に向かって急激に下る。高まり部では、瓦が多量に入った溝、建物跡、土壌<sup>どこう</sup>などを検出した。東側では溝、建物跡、土壌などを検出している。

**建物跡** 調査区中央部の建物は東西1間、南北2間分を検出した。柱間は約2.1mある。西側の高まり部では東西2間（1間約2.1m）、南北1間（1間約2.4m）分の建物跡を検出した。平安時代後期の遺物が出土した。

**溝跡** 調査区の中央部から東端にかけて東西・南北方向の溝を検出した。東西溝は幅約1.4m、深さ約0.2～0.3mで東側の南北溝と連続する。南北溝は2条あり、幅約1.6～1.8m、深さ0.3～0.4mある。南北溝の溝心<sup>しんしん</sup>々間の距離は約9.0mある。これら3条の溝からは平安時代後期の遺物が出土した。西側の高まり部では

東西方向の溝を検出した。幅約1.0m、深さ約0.2m、多量の瓦とともに平安時代中期の土器が出土した。なお、これらの溝はほぼ真東西・南北方向を示す。

**B区**（面積：約480㎡ 現地表面からの深さ：-2.2m） 調査区全面で遺構を検出した。中央部にはA区で検出した南北溝が延長する。西側の南北溝には東西溝が連続する。東側の南北溝の東で建物跡を検出した。なお、調査区中央から北西方向に向かって大規模に落ち込む遺構がある。

建物跡 東西5.8m、南北5.5mの範囲で柱穴を検出した。1棟分の建物跡であろうが、北へはさらに展びる可能性がある。

溝 跡 東側の南北溝は溝底に凹凸がある。幅約2.4m、窪んだ箇所では深さ約2.0mあり、A区の溝とは連続するものの形状は異なる。窪んだ箇所からは土器とともに箸・下駄などの木製品も出土した。西側の南北溝は現在調査中である。東西溝は幅約1.5m、深さ約0.2mある。これら3条の溝とも平安時代後期の遺物が出土している。

**C区**（面積：約700㎡ 現地表面からの深さ：-0.8～2.3m） 調査区のお大半は既存の建物の基礎で破壊されていたが、南西部と北東部で遺構を検出した。南西部ではA区で検出した東西溝の延長を、北東部では西京極大路の西側溝および側溝に接して建物跡と考えられる柱列を検出した。

溝 跡 西京極大路西側溝は、周辺に攪乱を受けており幅は不明であるが、深さは約0.2mある。A区から延長する東西溝は、幅約1.3m、深さ約0.2mある。これらの溝からは平安時代後期の遺物が出土した。

**D区**（面積：約200㎡ 現地表面からの深さ：-0.9～2.6m） この調査区も大半が攪乱を受けいるが、調査区中央部で西京極大路西側溝と考えられる南北溝を検出した。溝の東側では道路敷を検出している。また、溝の西側では柱穴を多数検出しているが、建物としてはまとまらない。

西京極大路 C区で検出した溝の続きである。幅約1.0m、深さ0.2mある。平安時代後期の遺物を包含するが、上面では室町時代の遺物を含む。

道路敷は礫を密に敷き詰め堅固である。道路敷は北へ向かって下がり、春日小路延長部分で最も低く、道路敷上面の比高差は約0.5mある。

**A区拡張区**（面積 約450㎡ 現地表面からの深さ：-1.3～1.4m） A区で検

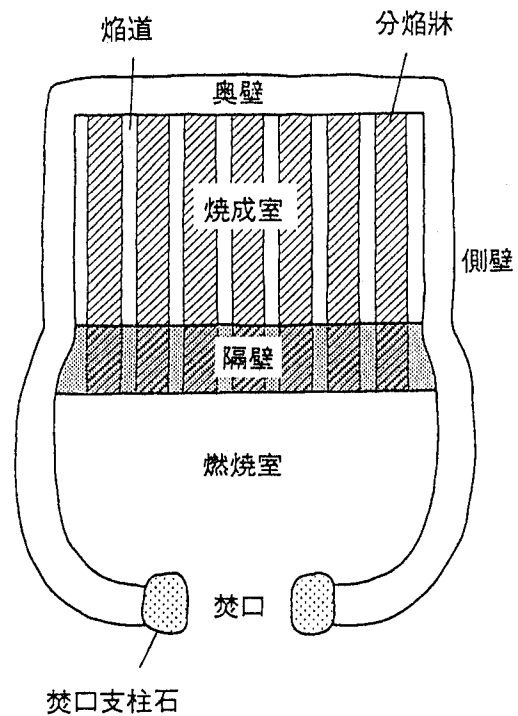
出した平安時代中期の東西溝には窯壁の破片や焼成不良の瓦が含まれ、南側に窯跡の存在が予想できたことからA区の南に拡張区を設けた。その結果、中央部で分焰牀（ロストル）式の平窯を1基検出した。

窯の周辺には、<sup>ねんしょうしつ</sup> 燃焼室からかきだした灰や炭、破損した瓦などを捨てた灰原と呼ばれる土層が広がっている。窯の上面には中世から近代にかけての耕作土層が堆積しており、上部は耕作地化にともない大部分が破壊を受けていたものの、下部については焚口から燃焼室、焼成室までほぼ完全な状態で残存していた。

<sup>ようへき</sup> 窯跡 窯の内部は強い熱を受けるため、窯壁は内側から外に向かって青色→赤色へと元の黄色から変色する。窯から瓦を取り出したり、窯が破損した場合には元の窯壁の内側にさらに粘土などを貼って補修・改築を行う場合がある。窯壁の変色した範囲の観察から、この窯については2回程度の改築が行われた痕跡を確認している。現在検出している窯は、この窯では最後に改築された、最も内側のものである。

窯の検出面での状況は、まず、約4mをこえる範囲にわたり地山を数十cm程掘り下げ、そこに粘土と瓦を積み重ねて窯壁を構築している。窯壁に使用された黄色粘土の検出範囲は、幅3.5~3.9m、奥行約4.0mある。窯の主軸はほぼ東西方向を示し、西側から焚口、燃焼室、焼成室となる。焚口部には花崗岩の支柱石が2基残存していたようであるが、北側の花崗岩は抜き取られていた。

最後に改築された窯の検出面での状況については、燃焼室は幅約2.4m、奥行約2.0mある。燃焼室と焼成室の間には段差がある。焼成室は幅約2.3m、奥行約1.4mある。<sup>おくへき</sup> 奥壁、<sup>そくへき</sup> 側壁、分焰牀（ロストル）ともほとんど残っていなかったが、分焰牀の痕跡は7本ある。



瓦窯の模式図

#### 4 出土した遺物

これまでに出土した遺物は、遺物整理箱で100箱をこえる。遺物は平安時代前期から室町時代後期のものまでである。大半はA区から出土した瓦類であるが、A・B区の溝からは多量の土器類も出土している。平安時代前期から中期にかけての土器類はA区西側の東西溝やA区拡張区の<sup>はいばら</sup>灰原などから、平安時代後期の土器類はA・B区の溝などから出土している。遺物は未整理のため、これまでに明らかにできたものについて示す。

土器類 <sup>はじき</sup>土師器・<sup>すえき</sup>須恵器・<sup>こくしよくどき</sup>黒色土器・<sup>りよくゆうとうき</sup>緑釉陶器・<sup>かいうとうき</sup>灰釉陶器・<sup>ゆにゆうとうじき</sup>輸入陶磁器のほか、<sup>ぼくしよどき</sup>墨書土器あるいは記号を線刻した土器もある。輸入陶磁器には中国から輸入された<sup>はくじ</sup>白磁や<sup>せいじ</sup>青磁の椀などがある。

瓦類 <sup>のきまるかわら</sup>軒丸瓦・<sup>のきひらかわら</sup>軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。

木製品 下駄・箸などの製品のほか、板状や棒状を呈したものがある。

#### 5 まとめ

今回の調査では多くの成果を挙げる事ができた。主要な成果について示し、まとめとしたい。

1) 西京極大路 この道路は、花園駅構内の発掘調査で側溝や道路敷が検出されている。溝の時期は平安時代後期とされ、今回の検出例と同時期であり、延長部を確認できたことになる。花園駅構内の調査例は法金剛院の建立に伴う周辺整備と考えられるが、同一時期の溝であり、同寺に関連する整備が寺域を越えて行われたのではないかと考えられる事例として重要である。

2) 平安京隣接地 敷地西側で多くの遺構を検出することができたが、特に、東西・南北方向へ延長する溝は法金剛院の建立と同時期のものと考えており、先の大路例とともに、この地域にも同寺の影響が想定できる遺構である。また、平安京外とは言え、西京極大路に沿って建物跡を複数検出できたことは、平安京周辺の状況を知る手がかりとなる。

3) 瓦窯 平安京の周辺に分布する平安時代中期の瓦窯跡は、<sup>くりすの</sup>栗栖野瓦窯跡、小野瓦窯跡、池田瓦窯跡、河上瓦窯跡、森ヶ東瓦窯跡などがある。しかし、窯の検出例については、池田瓦窯跡で良好な状態で検出されたほかは、河上瓦窯跡や

森ヶ東瓦窯跡で一部が検出されているに過ぎない。従って、今回の発掘調査で未知の瓦窯をほぼ全容のわかる状態で検出できたことは、特筆に値する。この窯跡は、以下の事柄について新たな情報を提供することができる。

①上記の各瓦窯との比較検討により、窯の規模や構造の変遷を知ることができること。

②ここから出土した瓦の文様などから各瓦窯との関連を知ることができること。

③この出土瓦と各遺跡で出土している瓦を比較することにより、生産と供給の状況がわかること。

④上記の各瓦窯はいわゆる「官窯<sup>かんよう</sup>」と呼ばれ、当時の役所である「木工寮<sup>もくのりょう</sup>」や「修理職<sup>しゅりしき</sup>」などに属していたことがこれまでの研究によって明らかにされてきた。この窯跡も関連する可能性がある。

今後、さらに下層の窯の調査を進めることによって、より具体的な資料を提示することができるものと考えている。

栗栖野瓦窯跡 官窯。「栗」文字を有する瓦がある。

所在地：京都市左京区岩倉幡枝町

小野瓦窯跡 官窯。「小乃」文字を有する瓦がある。平安時代中期の窯跡は確認されていない。

所在地：京都市左京区上高野小野町・池ノ内町・尾保地町

池田瓦窯跡 1983年の発掘調査で半地下式のロストル式平窯が3基検出された。「右」、「右坊」などの文字を有する瓦がある。

所在地：京都市東山区今熊野池田町

河上瓦窯跡 1980年の立会調査でロストル式平窯の焼成室基底部が検出された。「川」、「川上」「河上」などの文字を有する瓦がある。

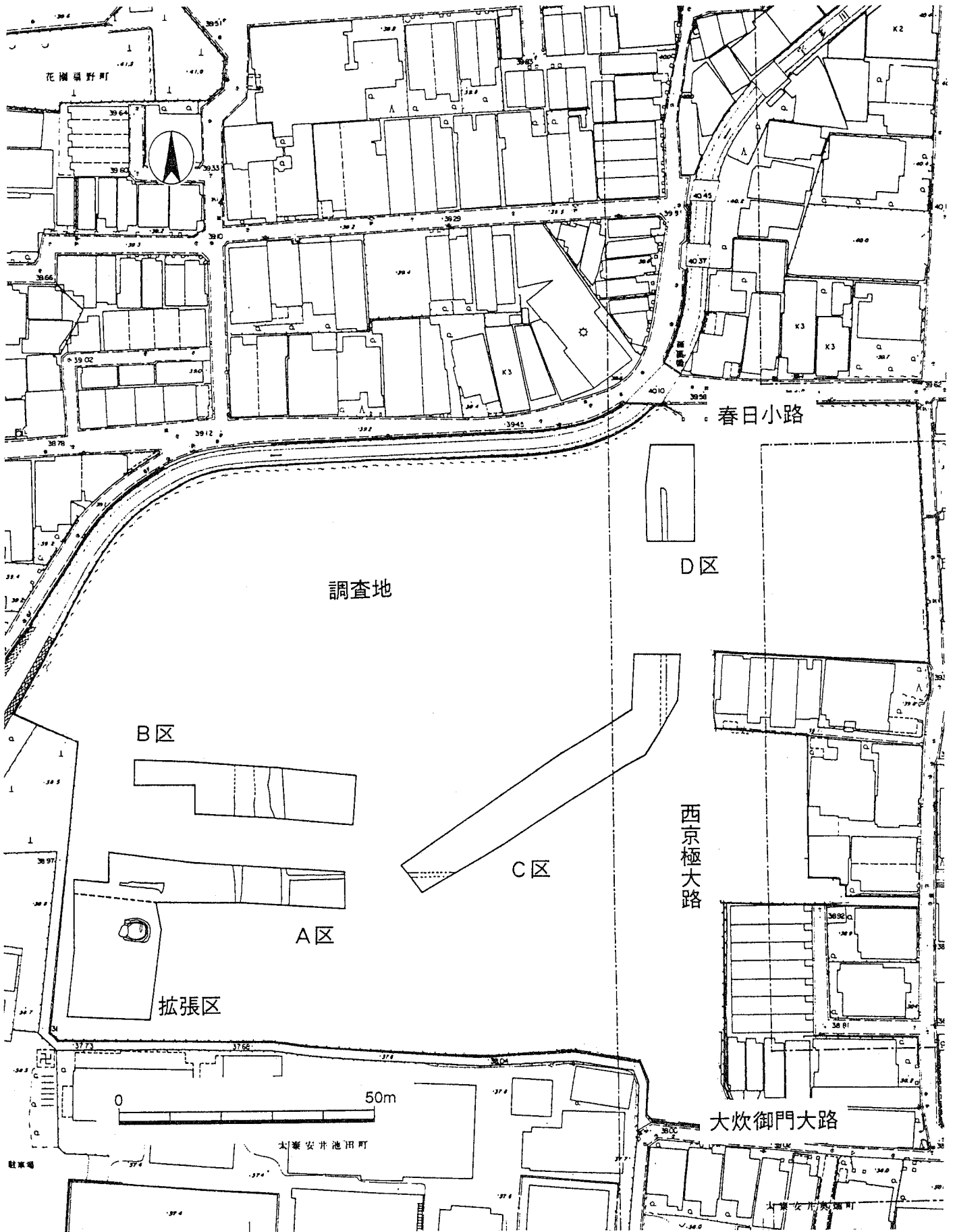
所在地：京都市北区西賀茂丸川町・大宮中ノ社町

森ヶ東瓦窯跡 1986年の立会調査でロストル式平窯の燃焼室と焼成室の一部が検出された。「下」文字を有する瓦がある。

所在地：京都市右京区太秦森ヶ東町・和泉式部町

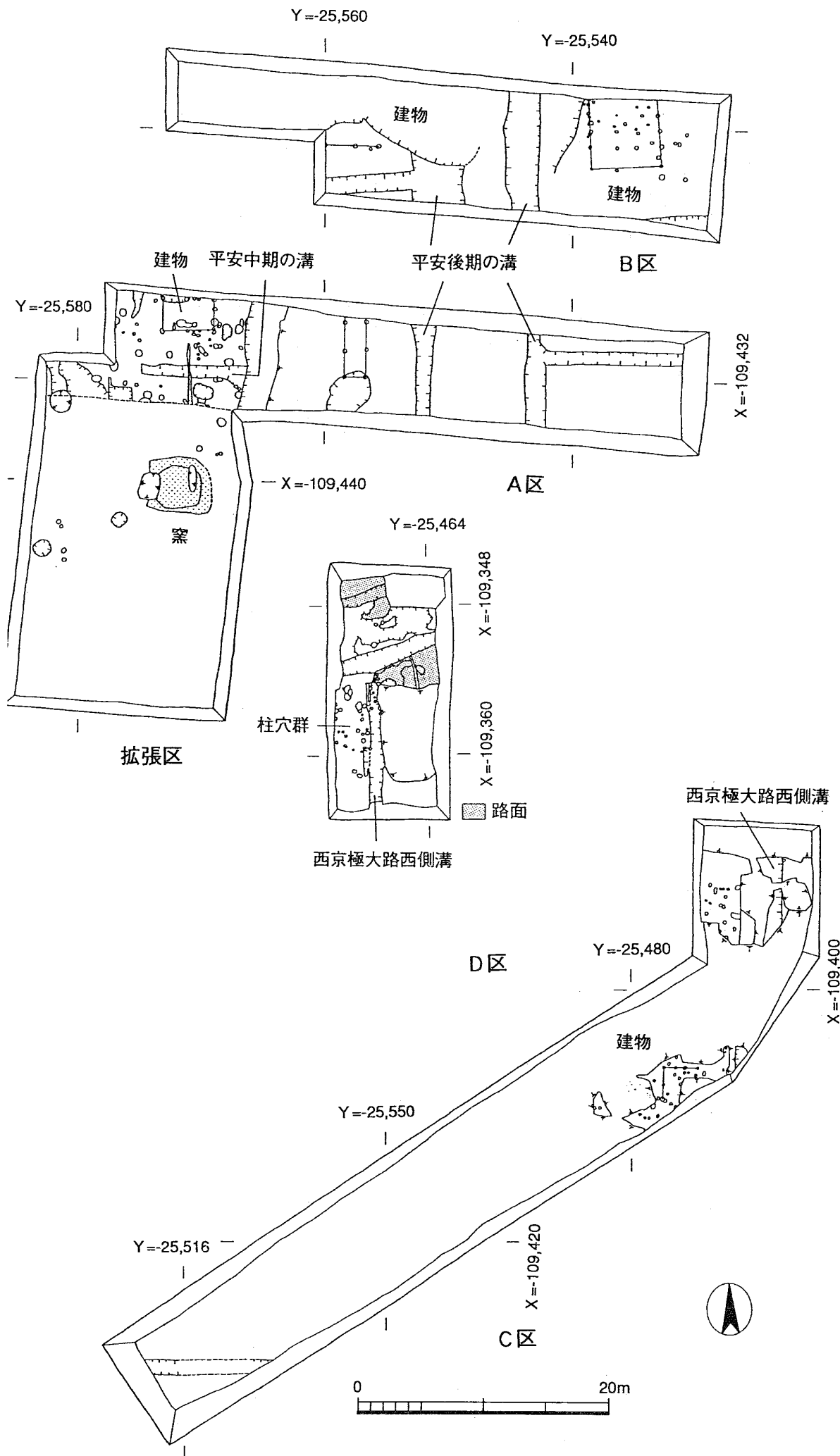
西賀茂角社瓦窯 平安時代前期の瓦を生産した。角社東群瓦窯、角社西群瓦窯の群構成が明らかになった。古代学協会によって1970年と1971年に発掘調査が実施された。

所在地：京都市北区西賀茂角社町

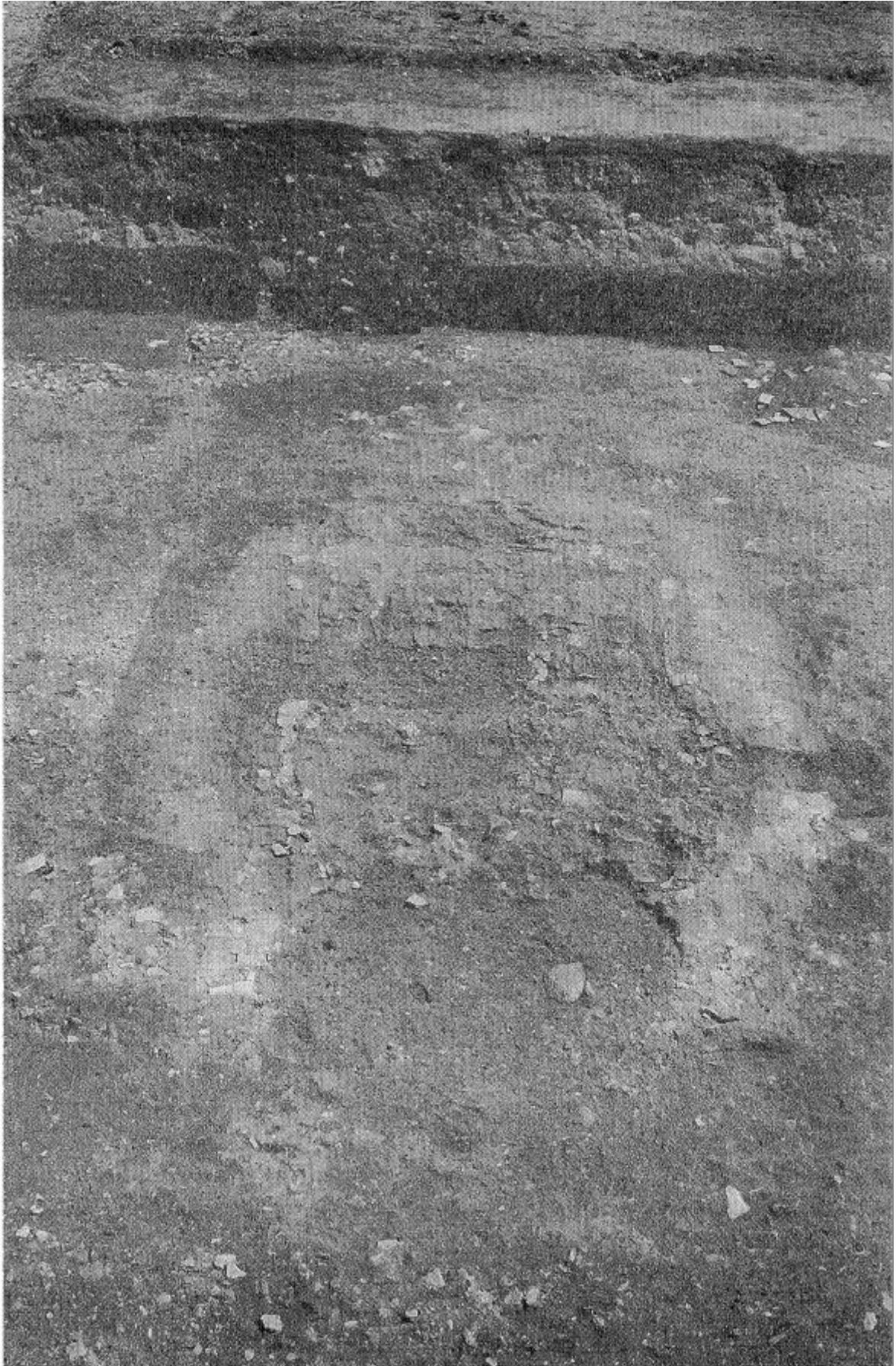


調査区配置図 (1/1,000)





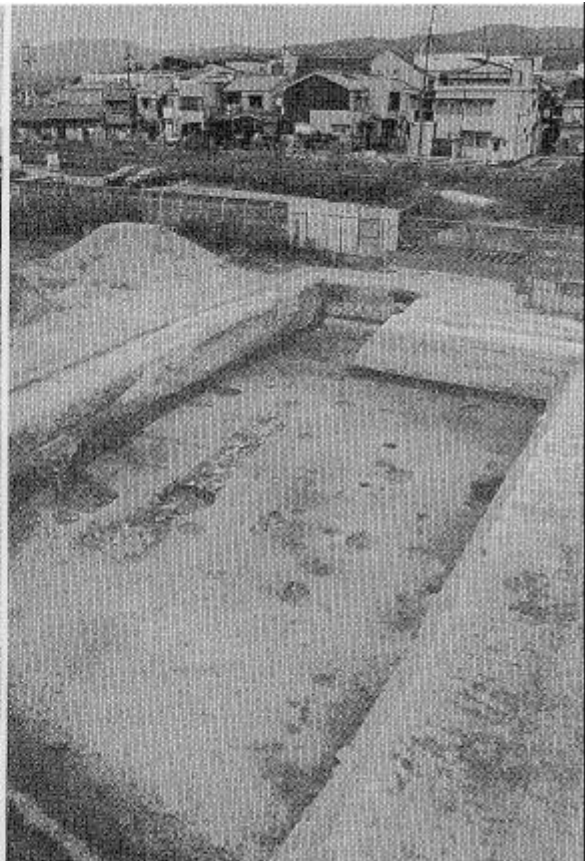
各調査区平面図 (1/400)



A区拡張区の瓦窯跡検出状況（西から）



A区全景（東から）



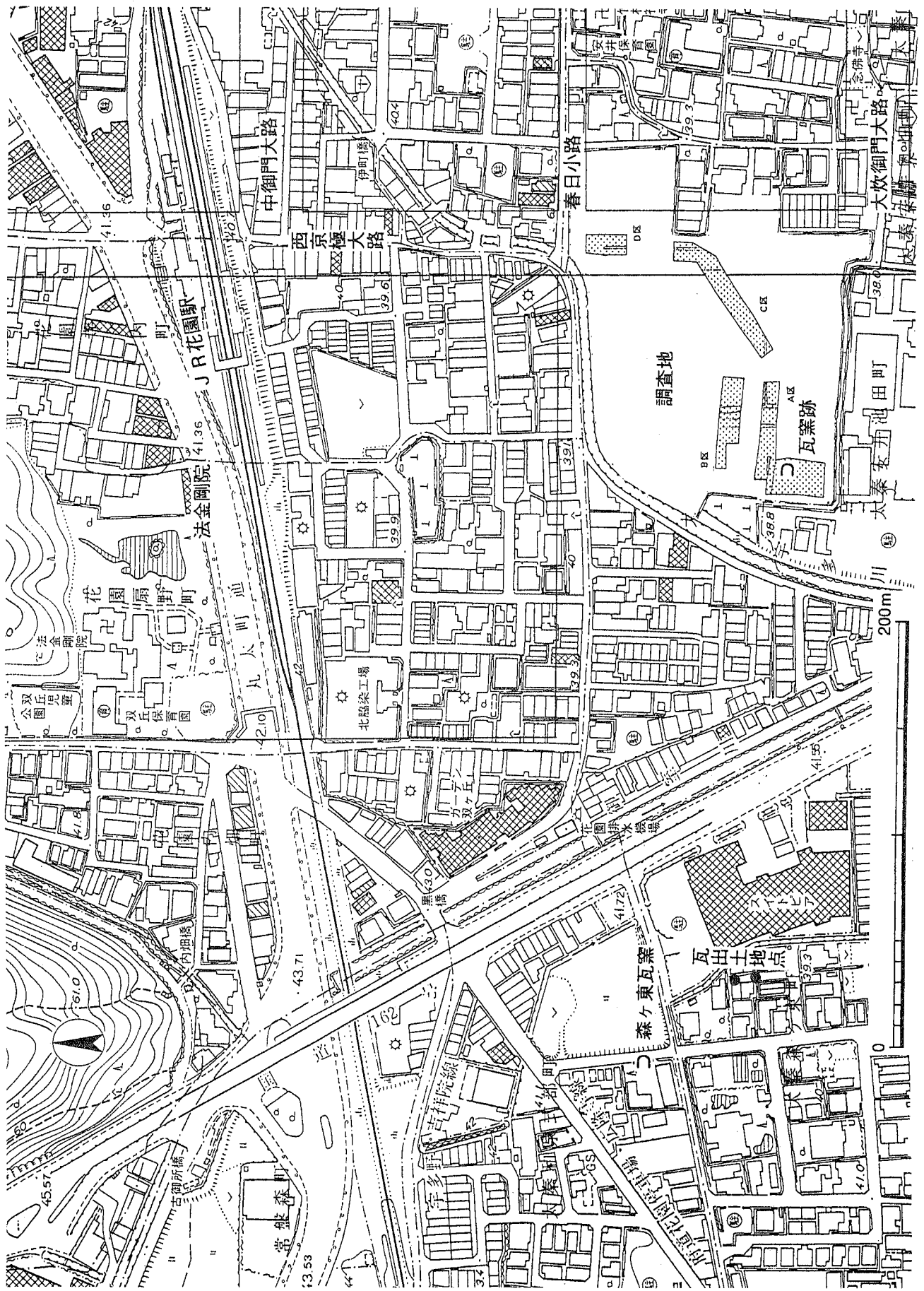
A区西半近景（北東から）



C区南東部 西京極大路と建物跡（西から）



D区全景（北から）



調査位置図 (1/2,500)